三上参次博士と三井文庫

中田易直

ここにいう「三井文庫」とは、正確には大正七年（一九一八）からの名称であるが、この三井家の歴史編纂事業は、遡って明治三六年（一九〇三）一一月頃から「三井家編纂室」として発足していて、両者を含めて私は総称して呼称している。

三井文庫は三井家同族会の三井高棟（たかみね）議長（北三井家、総領家十代の当主）の発議によって、三井家の系図や歴史を明らかにする目的で、本格的に三井家々史及び事業史編纂方を設置することとなり、日本橋駿河町（中央区室町）の三井本館内の一室に設けたが、それを始め三井家編纂室と呼んでいた。

この事業を当初から顧問として協力され、指導的役割を担い且つ全うされた方が、東京帝国大学文科大学教授、史料編纂掛事務主任（現在の史料編纂所長に当る）三上参次文学博士である。三上博士は明治三六年（一九〇三）の当初から、この世を去られる昭和一四年（一九三九）まで、三六年間にわたって三井家の歴史関係事業に関与され、三井家の家制や事業史、その資料の蒐集・整理、第一稿本三井家史料の編纂と全八十四冊の完成、三井事業史の研究と稿本作成、三井関係史料の保存、戸越の三井文庫の創建などなどに貢献されたことについては、あまり知られていない。この際三井文庫との関係に限って、三上博士の業績を詳細に検討してみたいと思う。

右の目的で一応三上博士の略歴、歴史編纂に関する実績やお人柄などについて若干触れてから、三井文庫との関係に

入りたいと思う。

なお文中三上博士その他の方々に対する敬称は省略させていただく。

一　三上参次博士略歴

（一）

三上参次の略歴や学風については、これまで高弟辻善之助の「故本会（史学会）理事長三上参次先生略歴」（「故三上参次先生略歴」と別称する）[1]、と高弟中村孝也の「三上参次先生を憶ふ」上・下[2]によって、十分に明らかにされているのであって、この両先生の懇切な追悼文を参照しつつ、本小論に必要と思われることを紹介していきたい。なおこの追悼文の他に、三上参次自身の『懐旧談』が残されていて、三上の前半生のことが興味深く語られていて有意義である[3]。

三上の『懐旧談』と関連して、石川松太郎が「三上参次先生と談旧会」という「解説」が、『明治時代の歴史学界三上参次懐旧談』の巻末に書かれている。石川松太郎は石田梅岩心学の研究者として著名な石川謙の令息で、石川謙が三上参次の親しい教え子の一人であった関係で、石川が三上の「談旧会」の記録の謄写刷を保存していた。またその中に詳細な「三上参次履歴書写」（臨時帝室編纂局の罫紙二十一枚よりなる）が入っていた由である。その略履歴書が同書の「解説」のあとに収められていて大変信頼できるものである。なおこの「談旧会」は十九回行われ、その速記録の原稿が三上参次の孫の三上愛子のところに残って保存されていた由である。

また次の文献が参考になる。辻善之助が大正六年（一九一七）三上参次勤続二十五年の祝賀会の時に起草した「祝文」[4]や、その時に東京帝国大学史料編纂掛を代表して田中義成が行った祝辞などが残っている[5]。

また『史料編纂所史　史料集』の中の「退職者履歴書」に三上と史料編纂掛との関係や、最後に兼職を解かれるまでの詳細な官歴が残っていて、[6] 先の略歴書と共に信頼できる。また昭和一九年九月刊『江戸時代史下巻』の巻末に辻・中村両高弟の前記紹介の追悼文の全文が掲載されている。その他昭和五二年に講談社学術文庫の中に、三上参次『江戸時代史』全七冊が再刊されているが、その七巻の末尾に辻・中村の追悼文と秋山謙蔵の「解説」がある。

その他三上の著書や沢山の論文約百点余があるが、今回は論文類については十分検討することは出来なかった。[7]

（二）

三上参次は慶応元年（一八六五）九月一〇日播磨国神東郡御立村（旧姫路藩領、現在姫路市船津村御立）に漢方医の幸田貞助の三男として誕生した。父は貧しい山村の医者であったという。参次がやっと物心のついた幼い頃、姫路藩士の三上勝明・もとの養子となる。この三上家は定府の士で、養父の勝明は始め江戸小石川の酒井藩邸に仕えていて、微禄ではあるが、相当立派な性行の人物であったと伝えられている。明治維新後、勝明は姫路に帰って寺小屋を開いて教えることなどをしていて、この寺小屋が後の小学校になったという。[8]

三上参次は明治一〇年（一八七七）七月姫路県立模範小学校を卒業し、更に明治一三年（一八八〇）七月、兵庫県公立姫路中学校本科第一級を卒業し、暫く豊臣村小学校に奉職している。ついで明治一四年（一八八一）二月上京し、同年九月東京大学予備門に入学、ついで明治一八年（一八八五）卒業後東京大学文学部に入学、明治一九年（一八八六）に東京大学が帝国大学と改まり、五分科大学と大学院で構成された。同二一年には三上は特待生となり、翌明治二二年（一八八九）七月帝国大学文科大学和文学科を卒業した。更に国史研究のため、同大学院に入学、九月には文科大学給費研究生を命ぜられ、翌二三年九月には帝国大学臨時編年史編纂掛編纂助手を嘱託され、始めて同掛に出入りして毎日

諸史料を閲覧し、史料研究に興味をもつようになっていた。このように極めて順調に研究活動が始まっていた。

当時は専攻として和漢文学科が分かれて和文学科・漢学科などはあったが、まだ史学科とか国史科は専攻として存在していなかった。なお国史科は明治二〇年から出来ている。三上の『懐旧談』によれば、この頃文科大学、すなわち今日の文学部にあたるわけであるが、毎年一人、二人の卒業生であったが、明治二二年には哲学科を含めて六人も出していた。勿論国史の研究者は三上のみ[9]、「当時文学士というものは、大いに持てたもので、方々の雑誌書肆から引っ張られたもので」（『懐旧談』[10]）あると語っていて、三上も早速金港堂という書物屋から出版したいから書いてほしいと交渉をうけ、結局同級生の高津鍬三郎と二人で『日本文学史』上・下を刊行している[11]。また卒業した九月には皇典講究所で講演をしていて、テーマは「歴史紀年法」といい、内容は、「年号を立て、また年数を記録するについて、日本にはいろいろむずかしいことがあることについて講じた」（『懐旧談』）と皇典講究所の雑誌『講演』（一九号）に載っている由であるが、三上が公衆に向って演説したのはこれが始めてといった具合であった[12]。

さて三上は本職の帝国大学臨時編年史編纂掛の嘱託として、始めて修史事業に関係するようになるが、当時重野安繹が編纂委員長、久米邦武・星野恒両編纂委員の指導のもとで、編纂が進められていた。ところがその時行政整理が行われ、明治二三年九月に内務省地理局地誌課が帝国大学に移管され、翌一〇月地誌編纂掛が設けられた。

明治二四年三月には臨時編年史編纂掛と地誌編纂掛とが合併して史誌編纂掛となって文科大学に所属し、従来の態勢の下に『大日本編年史』出版に向けて作業が進められていた。ここに例の久米邦武論文事件が発生し、久米は明治二五年三月非職を命ぜられ、政府の反発も強く、結局明治二六年四月一〇日付で帝国大学史誌編纂掛事業が停止となった[13]。井上毅文部大臣は、政府にて国史を撰述する必要はなく、殊に漢文で撰述するのは時世に適さないとの趣旨で事業の停止の理由を説明している。

さて三上は明治二四年九月帝国大学文科大学の史学講義を嘱託されている。また同年七月尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校教員検定委員を文部省から嘱託されている。まだ三上は文科大学大学院の給費研究生をつづけていた。なおこの年『松平楽翁公と徳川時代』という著書を刊行している。当時世間の人々が西洋にばかり傾いて、日本のことを忘れていることを慨嘆して、彼はこの種の著書を出したという（『懐旧談』五一頁）。

明治二五年（一八九二）三月には、女子高等師範学校の講師を嘱託され、同年七月には任女子高等師範学校教授兼文科大学助教授に採用された。ついで翌二六年（一八九三）九月には、本官を免じ専ら帝国大学文科大学助教授に任ぜられている。この頃の文科の先生方は偉い学者が多かったが、ビジネスの上では常識を欠く人が多かったので、文科大学長から学科のことや人事などについては、三上助教授のところに相談がくることが多かったという。このことが三上の文科大学での仕事を極めて多忙なものとしていったと考えられる。

史誌編纂掛が二六年四月に停止になっていたが、その年の一〇月に外山文科大学長から三上が呼ばれて、史誌編纂掛は中止になったが、そこに集めてある珍書は実に沢山あるから、これを『群書類従』のような形で漸次出版してはどうかという話しがあった。それで三上は田中義成・坪井九馬三と三人で相談し、これが『文科大学史誌叢書』という木版本の刊行となった。例えば『家忠日記』全六冊、『三河物語』全三冊、『晴右記』、『晴豊記』全三冊等々といった具合であった。

ところが修史館以来集めた史料は数千冊もあるので、そのままに保存しておくのも遺憾なことである。『日本書紀』のように漢文の編年体はもう中止してもよいが、せっかくこれまで集めている史料は何とか生かしたいものだと考えて、それにはとても個人の力では資金はないし、この仕事自身も個人のすべきことではない。勿論国家的事業としてやるべきことであると、外山文科大学長、浜尾帝国大学総長にしばしば建議したところ、これはよほど強く響いたのである。

明治二八年四月に大学に史料編纂掛が設置されることになり、三上は即刻史料編纂委員を命ぜられた。さきに井上毅文部大臣が中止した史誌編纂事業の継続にはなるけれども、編年史の編纂ではなく、多様な史料の方だけに限って続けてやっていくことにした。この史料集成は三上が言い出したことであるから、三上が是非やれということになり、編纂委員となり、後にその主任に任命された。以後、関係していた大学の嘱託を一切罷めて（女子高等師範学校、東京専門学校（現在の早稲田大学）、国学院など）、大学の講義と史料編纂掛の事業に没頭することになった。そうして大切な公の仕事に携わっている間は、自分一個の著述は慎もうと考えて専念することにしたという（『懐旧談』[14]）。史料編纂掛と三上参次の関係は別途の項目で述べる。

なお大学卒業と大学院入学の頃のことを詳しく述べているが、これは三上が特に優秀で国史の研究に熱心で、史料に大変興味を持っていたということもあったが、当時と現在の大学生を比較して、そのおかれた環境の違いに注目したいのである。専攻する人が一人、二人の時代で、しかも世間が西洋ばかりに傾いて、日本のことを忘れている世相の中で、大学でも国史の講義が必要とされるようになってきたのである。このように大学の卒業と同時に職や仕事が沢山あって忙しくなる。大学の講師も助教授も女高師の教授も手近に次々と発生していた時代なのであった。

さて明治三〇年（一八九七）六月帝国大学は東京帝国大学と改称し、三上参次は明治三二年（一八九九）一月一一日、東京帝国大学文科大学教授に昇進した。足かけ八年目のことであった。当時国史の教授達は皆老人で、漢学者系統や水戸学の影響下の堅い学者が多く、これまで助教授ではあるが新しい学問を身につけた若い三上に、大学側からも学生たちからも色々と期待されるところが多かったようである。当時大学の教授になると、講座制度が始まっていて、講座があって、それを担任するということが教授の正しい職務であった。当時国史国文で四講座があって、栗田寛、星野恒、黒川真頼、物集高見の四教授が担任していた。それで三上は担当する講座がなく、専ら史料編纂に従事せよとの命令で

あった。同日に東京帝国大学文科大学史料編纂掛主任を任命されている。それでも三上は足かけ八か年の助教授から教授になって、「初めてこれで尻尾が除かれたという感じがする」と感想をもらしている。談旧会の席で中村孝也君はご承知でしょう（笑声）と三上が声をかけている。中村も東京帝国大学では助教授は十三年間で教授に昇進しているのである。[15]

三上が教授になってから間もなく、同年三月二七日文学博士の学位が授与された。当時は学位を取得するには、論文を提出するか、総長の推薦によるか、もしくは博士会の推薦によるかの三つの方法があったという。三上は博士会の推薦・決議によってということであった。[16] この辞令が珍しいのであげておく。「博士会ニ於テ学位ヲ授クヘキ学力アリト認メタリ、仍テ明治三十一年勅令第三百四十四号学位令第二条ニ依リ茲ニ文学博士ノ学位ヲ授ク　文部大臣」とある。三上三五歳の時である。[17]

明治三三年（一九〇〇）四月史料編纂掛事務主任（現在の史料編纂所長）に任命された。また明治四一年（一九〇八）八月には勅旨を以て、帝国学士院会員となり、明治四四年に維新史料編纂会委員となる。また翌四五年三月東京帝国大学評議員を命ぜられ、大正四年再任されている。大正三年七月には上田萬年文科大学長欧米出張不在中の学長代理を命ぜられている。

大正八年（一九一九）七月には、長期にわたって中心となっていた編纂事業から身を引くことになり、願いにより史料編纂官の兼官を免ぜられ、文学部教授（国史学第一講座担任を命ぜられている）に専念する体制となった。史料編纂掛の頃は毎年のように全国的に史料探訪の出張旅行があって、極めて多忙であった。

大正一〇年（一九二一）九月東京帝国大学文学部長に補され、例の一二年九月の関東大震災に遭遇している。東京帝国大学やその図書館など火災による大被害を被っているが、極めて適切な対応をしている。

なお三上は明治三五年（一九〇二）七月、ドイツハンブルグで開催された東洋学会に参加し、更に大正一〇年（一九二一）にまたヨーロッパに出張を命ぜられ、諸国を巡回している。

大正一五年（一九二六）三月には、定年申合わせにより東京帝国大学を退職し、八月には東京帝国大学名誉教授の称号を授けられている。さて定年になった三上参次は、その余生を学者としての立場から自分の研究業績を二、三まとめておきたいと願っていて、それなくしては後世の笑い者になるかも知れない。これまでの史料編纂掛の『大日本史料』や『大日本古文書』の編纂中は、大切な公務にあたる期間には私の研究著書はつくらないということは、三上の主義であって、当初の史料編纂掛の職員にもこの傾向は影響していたのである。ところが、定年直後「宮内大臣の一木喜徳郎君が是非明治天皇御紀をやってくれ、これまでかれこれの沿革はあるけれども、やってくれないと困る」と言って来た。三上は「それは困る」と言って、自分の立場と研究の取りまとめの計画のあることを繰り返し説明したが、一木は「最後の五年間を繰り延べにしてくれ、こちらも大事なことである」といった論法で説得されて、ついに同年五月、臨時帝室編修を主宰することになった。[18] 三上は「こういうことで研究の方は非常に遅れるので、いつも痛切に感ずることである」と言っている。三上の心境はよくわかることで『明治天皇御紀』は大正三年（一九一四）一一月から皇室令によって公布・施行され、宮内省内に臨時編修局が設けられ、御紀の編修が始まるのである。しかし進捗状況は思うようにいかなかったようだ。そこで編纂手腕のある定年の三上に飛び付いたのでないだろうか。結局、三上も最後の御奉公『明治天皇御紀』の編纂に打ち込んでいくが、やがてこれから生涯この編纂に尽くすことになった。この編纂については別項で若干追加しておきたい。なお前後するが大正九年（一九二〇）より『帝室制度史の研究』が始まり、三上も委員となっていたが、大正一五年より編纂主任となり、昭和一二年八月、その第一巻が出版され、以後続刊されている。

昭和七年（一九三二）には帝国学士院の互選による貴族院議員に任ぜられ、三上の活躍は辻善之助の言をかりれば

「侃諤（かんがく）の論一生を警醒せらるる所多かった」といわれている。[19]

三上は東京帝国大学教授、同名誉教授として、政府その他の重要な委員会には相ついで委員として関係されていて、一々あげきれない。これ程多忙な先生は東大でも前後におられないのではないか。それで三上の業績も生存中には刊行することが果されず、僅かに東京帝国大学での講義録は、辻善之助らの教え子の手によって、捐世後の昭和一六年に『尊皇論発達史』、昭和一八年『国史概説』、『江戸時代史上』、昭和一九年に『江戸時代史下』が富山房より刊行された。それは丁度私の大学生の頃で、これらの御著書にはたいへんな学恩をうけたものである。個性のある史論が随所に見られ、興味深く読み込んだことを記憶している。但し百点余りの論文については、論文集がまだ刊行されておらず残念なことである。

（三）

すでにふれたように明治二八年（一八九五）四月編纂事業が内容を変更して再開され、文科大学内に史料編纂掛が置かれた。なお三上参次らが前年から、当時の総長浜尾新や文科大学長外山正一と相談していたことであるが、従来の修史事業は六国史のあとをついで、国史を漢文体の編年史でつくることを目的としていたが、今度は専ら史料の編纂に目的を変えたのである。同年七月浜尾総長が史料編纂掛の人々を一堂に集めて訓辞している。これは三上の用意になるもののようであるがその大要は、今度は史料の編纂に主義を変えたということと、それから史料の編纂であるから真偽の取捨は勿論しなくてはならないけれども、好む好まぬによってみだりに一個の見識を加えて史料を取捨してはいかぬ。歴史の材料としては、これまでと違って、政治上の出来事のみならず、社会の各方面に亘る材料を蒐集しなければならぬ。またこの仕事は年数が限られていることであるから、これに従事する者一同健康に注意して、病気のため仕事に影

響を与えることのないよう心掛けること、というようなことが訓辞された。[20]

この新しい目的は三上参次らと大学執行部の方針のようで、後に史料編纂所長になる辻善之助は『三上参次先生略歴』で、史料編纂の再興のことを次のように説明している。「今や時勢は昔と異り、漢文を以て国史を作るといふやうな時ではない。且つ二、三の人の考を以て文を作るは、それ等の人の主観によりて事実を曲げらるる處なしとせず、それよりは、寧ろ材料をそのまま編纂して之を公にし、以て一般学者の利用に供するに如かず。その材料を集め之を編纂することは、個人の力を以てしては十分なることを望むること能はざれば、国家事業として行ふべきことである。而して世間の学者が、その材料を活用して、政治史なり、経済史なり、風俗史なり、宗教史なり、その他文化の各方面に関する歴史を作るに任せるがよいといふことになった。是に於て、漢文編年史を作ることは止めになり、専ら史料を編纂することとなった。即ち従来は史料の編纂は、漢文編年史を作る為めの手段であったものが、今度は手段が目的とかわったのである。[21]」と大変分かり易く説明され、今日の「史料編纂所」に引きつがれている。

担当の主な者は史料編纂委員として、文科大学教授星野恒、文科大学助教授三上参次と、田中義成及び小中村義象が史料編纂委員嘱託、また十六名の助手、他に写字生などを含む職員で構成していた。[22] 三上がここに有能な研究者を極力集めたのである。

史料編纂掛ではまず手をつけねばならないものとして、これまで蒐集した塙史料や、修史局の編纂史料のうち、よく整理されているものや修正を必要とするものがあり、また文科大学の史誌編纂掛の史料などは未完成のまま中止になっていて、これらの史料の修正や整理を必要としていて、明治二八年の再開から五か年かけて完成するべく計画を立てていた。[23] また新たに地方で史料蒐集すべきものが多く残っていて、社寺や旧公家、それに旧大名家、旧家の史料探訪を始めなければならなかった。

史料編纂掛での仕事始めとして、五か年を期限として、担当も文科大学の教授が編纂委員として分担するということから、三上は一番新しい時代（江戸時代）と事務を引受けることはすぐ決まったが、その他の古い時代は栗田、星野両教授が分担するわけであるが、これがもたついて、栗田は老人で毎日出勤して面倒なことをするのは堪えられないとのことで、事実史料編纂掛の仕事は辞退された。星野はやることになっていたが、同年四月二九日に脳溢血を起こし静養に入ることになった。結局古いところは田中義成、小中村義象の二人が変って分担してもらうことになった。このように若い三上が中心になって進めることとなった。

後の明治三〇年には、三上は史料編纂掛の事務主任（後の所長にあたる）をしていると『懐旧談』で語っているが、東大史料編纂所の記録によれば、主任は明治三一年から、事務主任は明治三二年からとの記録があって明確でない[24]。それで三上一人がこの種の事務主任をするのでなく「ほかの同僚らも一年代りに事務主任に当るようにしてもらいたい」と、外山文科大学長に申し出ている。この仕事は「格別むずかしいことではないけれども、雑用が多くて余暇がまるでない。これでははなはだ困る」。しかし「この編纂の仕事も大事なものであるから、ほかの仕事は顧みなくともよいという諦めは始終持っておりましたけれども、公の仕事をしている間は自分の好きな研究をして発表するというようなことをする機会のないことを残念に思っておった[25]」と。しかし外山からは「それはいかぬ。やはり責任は一人で負わなければ成績は挙がらぬということであったし、自分が言い出して仕事を始めた関係上、そう勝手なことも出来ないので、大正六年に罷める時まで、そのままずっとやっておったのです」と、長い間辛抱していた心境を語っている[26]。

大正六年（一九一七）三上の事務主任は兼職となり、田中義成が編纂主任として交代し、大正八年には黒板勝美が事務主任となり、翌大正九年には辻善之助が事務主任となって、三上が文学部専任となっている。三上はこの間心血をそそいで大役を果したというべきであろう。

なお参考までに再開当時の掛員規約と執務通則をあげておく。[27]

明治二八年四月一七日制定　文科大学史料編纂掛掛員規約

本掛史料編纂事業ハ其成功五年ヲ期スルモノナレハ、殊ニ同心協力孜々勉励シテソノ責任ヲ全クセサルヘカラス、故ニ掛員ハ編纂事業ノ成功ニ至ル迄ハ相互ニ左ノ諸件ヲ確守スヘシ

第一、各自歴史上ノ論説考証等ヲ公ニスルカ為メニ、本掛史料編纂事業ニ対シテ世上ノ物議ヲ招クカ如キ嫌アルモノハ厳ニ之ヲ避クヘシ

第二、各自論説考証ノ起稿ノ為メニ、公務中ハ勿論、其余暇ト雖モ、編纂事業ヲ妨クルカ如キコトアルヘカラス

第三、掛中ノ材料ハ如何様ノ名義方法ヲ以テスルモ、一切他ニ漏洩スルヲ得ス

第四、当分ノ内、従前大学部内ニテ出板セル諸学術雑誌及ヒ皇典講究所講演ノ外ニハ、歴史上ノ論説考証ヲ掲ケ又ハ著述ヲ公ニスルコトヲ得ス

第五、詩歌文章及ヒ教育上ノ論説等ニシテ、前述ノ箇条ニ触レサルモノハ、制限スルノ限リニ在ラス

右規約候也

明治二十八年四月

明治二八年四月一七日制定　文科大学史料編纂掛執務通則

一、出勤退出ハ定例ノ時刻ニ違フヘカラス

一、報時点鐘後五分時間、及ヒ昼餐ノ後午後一時ニ至ルマテヲ休息時間トス

　但昼餐ハ正午ヨリ始ムヘシ

一、休息時間ノ外ハ雑談喫煙スヘカラス、執務上ノ件ニ就キ他人ニ質問スル等ノ場合ニ於テモ、務メテ余人ノ妨害トナラザ

ルヤウニ注意スベシ
一、戸扉ノ開閉諸器具ノ取扱等ハ成ルベク静粛ニスベシ
一、喫煙昼餐及ヒ来訪ノ応接ハ必ス一定ノ場所ニ於テスベシ
明治二十八年四月

三上の史料編纂掛での成果は、やがて『大日本史料』『大日本古文書』の刊行によって果されている。明治二八年四月から五か年計画で、すでに従来の蒐集された史料の修正増補が分担者を定めて進められ、そろそろ五か年が近ずくにつれ、明治三一年（一八九八）一〇月総長や教授の坪井九馬三と出版についての相談を始めている。史料の集成増補を一応とめて、出版を新しく始めるためにはそれなりの予算の増額が必要となる。三上は具体的な冊数などの計画をあげて、この場で同意を得ている。[28] 理由はこれまでのように貴重な史料をいかに金をかけて集めて、写本などを作っても、万一のことがあると鳥有に帰してしまう。だから一部は複本を作っておかなければいけない。しかし、有力な大名家から原本を借用して写しても、返却したのち、家扶に不心得のものがいて、御用済と思って処分してしまうケースも生じている。勿論焼失することもあって、再度調べたい時には原本がなくなっている。それで毎年少しずつでも出版しておく方が保存上もよいのでないかということであった。[29]

出版の方は比較的原稿の整理してあるところからかかることにして、予算化にかかっている。ただ始めから四・五〇年もかかるといった出版計画では、議会を通すことは出来ないので、一五年の臨時継続事業として計画し、長すぎるので五か年を三期に区切って予算化し、明治三三年度の議会を通過させた。この間三上はかなり動いているようである。

三上の在職二五年の祝賀会の折り、始めから同僚であった田中義成の祝辞に、明治三三年で史料編纂掛の五箇年の期

間内に修訂がほぼ終った。その史料の年代は六国史に接続して宇多天皇の仁和三年より、孝明天皇の嘉永六年に至るまで、凡そ九六四年間の史料集成で、其冊数は六六〇〇余冊になる。ここで更に修正を加へ、一五か年を期して逐次出版する計画を立て、帝国議会の協賛を得てついに出版を始めることになった。此計画については菊池総長が熱心に尽力されたが、三上博士は其当事者として出版に関する一切の準備を整へ、予約出版の方法を立て、一年間に史料四冊・古文書二冊を出版することに決定したと述べている。[30]

この大日本史料稿本を出版するについて、三上は編纂の組織を改めた。すなわち一編より十二編まで十二に時代を区分して、夫々の分担責任者を定めて分担者をきめ、編別に組織して史料の一層の修正を加え誤謬のないように努力した。なお当初十六編に区分し、十二編より十六編までは江戸時代の区分としたが、現在も十二編までとまっている（十三編の分担は一時きめた時があるが、十三編の一は刊行されていない）。出版社も大学が出版して大学が売捌くことは下手であろうから、結局信用のある書肆に請負わそうということになった。しかし冊数も大変多くなる仕事であったので、業者も躊躇していたことは無理のないことであるが、有力な日本図書会社、吉川半七（現吉川弘文館）、富山房の三者連合の出版発売となり、印刷も難字が多い古文書を含むことであるので、印刷局ということで始めることになった。だんだん出版の部数が減ってきて世の中の状況も変ってくるので、後に大学で売捌こうということになり、編輯から印刷発売まで皆大学でやるというようになったという。[31] 出版・印刷・発売には色々と変化があった。

三上の『懐旧談』によれば、最初三上は十二編の一を担当し、田中義成が六編の一を担当した。「お互に校正をいく遍も見る。私のやったことを田中君が見る。田中君のやったところを私が見る。無論その夏休は一日も取りません。一日暑い盛りです。夜も宅に持って帰って蚊帳の中で十二時半、一時頃まで校正をやったことは珍しいことではない。それで六編の一は少なからず私共は頭を悩ましたものである。[32]」と心血を注いで仕事をしたという。また田中義成もこの

時のことを祝辞の中で、二年間ばかりは博士（三上）が率先して早出晩退、日曜もなく祭日もなく暑中休暇もなく、毎夜十二時過まで印刷の校合などするという有様で、掛員の中には疲労を極めて血を吐く者も出てき、其の時博士（三上）も衰弱せられたと述べている。[33] 両担当者の言葉である。

かくて明治三四年（一九〇一）二月二八日『大日本史料』第六編之一が刊行され、同年四月三〇日には十二編之一が刊行された。同年七月には正倉院文書であるが『大日本古文書』一が刊行された。この末尾には「異字一覧」が付記されている。編纂兼発行者東京帝国大学、印刷者印刷局で、発売所はさきの三者共同書肆である。

三上は出版は一五か年計画を期して着手したのであるが、勿論始めから一五か年で終了する仕事とは思っていなかった。それは表向きのことで、実際は半永久的な大事業であることはわかっていた。それに刊行とともに益々新材料（史料）の発見があるのは当然のことで、また西欧の日本関係史料などもルードヰッヒ・リース（帝国大学の史学科や史学会に関係）とも相談していて、当時の段階では欧文史料は写真と筆写の両方をしたいと希望していた。[34]

その結果六〇〇〇冊以上の原稿を修正しつつ、出版するのは到底期限を付けてすることではなく、永久的事業としなければならないとして山川総長と博士（三上）の御尽力の結果、明治三八年三月に勅令を以て文科大学に「史料編纂官」が置かれることとなった。ここに史料編纂事業は永久的のものとなったと田中は三上の業績を高く評価している。[35] 史料編纂掛の編纂が一〇年にして史料編纂官官制の施行となり、臨時の事業から本格的恒久的な編纂事業となった。最近では史学界の研究の中心的存在に位置ずけられていて貴重な存在となった。この田中の祝辞は大正六年（一九一七）のことであるが、この時までに三上の手で『大日本史料』五二冊、『大日本古文書』四八冊が公刊されていた。二〇〇六年の現在では『大日本史料』三八一冊、『大日本古文書』二一六冊の公刊が果されている。完成はなお道遠しであるが。

なお始め三上は保存上のことを考えて、正倉院文書が麻の紙で拵えた経巻であることで痛感した由であるが、日本の風土で西洋紙はどれだけ保つものか、「インク」で印刷するものがどの位保つのか検討して、要は保存法による注意は必要不可欠であるが、一部は永久に伝えるために立派なものを拵えておきたいということで、印刷局と相談し、印刷局ではまず王子の製紙場で作っている円紙幣の紙、あれが一番永久性があるということで、六部だけは紙幣の紙でやることにした。この六冊は三方に金箔を置くことにし、それも金箔を置くのに卵の白身をつかって摺付けるといった方法で、糊は虫がつくから駄目であるといった吟味をした丁寧な手仕事であった。それを御所に三部献上し、三部は大学に残す方針を立てた。[36] この後この種の本の作成と保存をしているかどうかはわからない。

三上は最初の刊行の『大日本史料』の「書物が出来て、これから続々と出版することが出来るのは愉快のはなはだしいもので、一部を亡き父の霊前に供えて見せた。結局宮中への献本は四部、大学へ残っているのは二部」ということになって、とにかく非常に嬉しかったといっている。[37] ただし初めての『大日本史料』十二編の一の一般向の図書を私も現在所有しているが、用紙も印刷も何の変化もしていない。

（四）

三上は皇室に関する御用を数々こなされている。御講書始における御進講が大正七年（一九一八）一月九日に光格天皇御消息を、大正九年（一九二〇）一月九日に御水尾天皇御消息について奉仕されている。また昭和天皇の即位後、昭和初年より五年にかけて明治天皇の聖徳について、時々御進講が行われているし、その他秀吉・家康の事蹟なども進講されたという。[38]

本論の一の（二）三上の略歴の項ですでにふれているが、定年直後大正一五年（一九二六）五月臨時帝室編修官長に

任ぜられ、明治天皇御紀の編修を主裁されることになった[38]。

三上の側近で史料編纂掛で仕事をしていた辻善之助の追憶によれば、明治天皇御紀の編修局が宮内省に設けられたのは大正三年（一九一四）のことで、何しろ大事業であるため十数年を経ても、全く前途の見通しがつかない状態であったが、三上が大正一五年（一九二六）臨時帝室編修官長に任ぜられてより、三上方式というか、「編修の期限を定め、編修官の担任及び功程を定め、以て鋭意事業の促進に力められて、先生の就任後七ケ年にして、明治天皇紀二百六十巻の完成を見るに至った[39]」とある。昭和八年のことである。ここでも三上の力量の程が示されていて、大編纂事業を完結させている。

この明治天皇御紀は大きな御記録の集成であって、直には公にせらるべき性質のものでなかったので、三上は国民が明治天皇に学ぶべきところも多く、且つ教化の普及に大きな影響のあるものと判断し、昭和九年（一九三四）帝室編修局残務整理に従事している頃、新に明治天皇御紀を編修して、これを公にすべきことを上申された。その結果として同年七月宮内省に公刊明治天皇御紀編修委員会が設けられ、三上が編修長として、これまでとは別個に重ねて御紀編修に関係された[40]。そのため昭和一一年三月に、広田内閣の組閣の時に、三上は文部大臣の候補として新聞辞令まで出されたが、明治天皇御紀の大切なことを思って辞退されている[41]。

中村孝也も当時東大の史料編纂官であったが、三上の指名で昭和一〇年五月宮内省公刊明治天皇御紀編修事務を嘱託され、三上の仕事を手伝っていて当時の様子を色々と伝えている。編纂委員は本居清造、須長真彦、布施秀治、熊谷小鷹の四名が主だったメンバーであった。

この事業は昭和一四年六月三〇日をもって終了する予定になっていて、三上は所員を督励し、所員の協力を得て同年五月下旬には、ほぼ一切の手配を修了し、公刊明治天皇御紀がほぼ完成していた。なお若干の修正について中村に所見

を語られていたが、六月七日朝に逝去された。五月中は何かと所員の身の振り方まで、それぞれ懇切な心遣いをしていたという。[42]

昭和一二年の夏、三上が大患におかされた時には、「令嗣勝君に向って、御紀編修の業が今少しで了ろうという時に、中途で死ぬのは残念である。あの業は自分に最も適任であると信じて居るのであるが、それも致方ない」と、述懐せられたと承って居る。「之はいかにも先生自らよく知るの明ありとも申すべく、その文章は、品格高く、厳正にして苟もせず、而かも国民一般に示すものとして平明暢達なるを要するものであるから、その点に於て、先生は最も適任であったのである。幸いにして、とにかく一通り脱稿を見るに至ったのは、喜ぶべきことである」と追悼の文を略歴で語っている。[43]

中村孝也はこの大患中御紀編纂の仕事のことで、三上はたびたび譫言を言われたことや、意識の明瞭なとき、医者に対して「もう二年間、私の命を保証して呉れないか」[44]と仰しゃったことなど、私共は悲痛な感に堪へなかったと語っている。ところがその後幸いにも奇跡的に健康が回復され、九月二四日には、永田町の御紀編纂委員会に出席し、久し振りに一同と会食されているし、一〇月二九日の宮内省会議室で開かれた御紀原稿の審査会にも出席して挨拶される程になっていた。[45]

（五）

三上の学問は西欧の科学的歴史学の研究法を学び、極めて合理的、実証的歴史学を志し、古来の伝統的な国史の研究を再構成して新しい国史学を築こうとされていた。その限りで穏健かつ堅実な学風をもって研究と教育にあたっていた。研究の内容は史料、とくに歴史の文書や記録を中心に、多くの史料を探求し、研究し、その客観的価値や事実の考証を

重んじ、明治の中・後期、大正期の歴史学界を指導された。それ故水戸学派や国粋的立場の史学に対しては批判的であった。

辻善之助は三上の学問を「先生、学は国学を経とし、洋学を緯とし、融会貫通巧に之を運用す。我邦史学の面目、是に於てか一新せり」「専ら科学的に本邦歴史を研鑽して、国史学をして独立の一科たらしめしは蓋し先生に剏(はじ)まる」。また「既に学は洋の東西に渉り、識富み才豊かに、三長該ね備はる。屢々斬新の研究を発表して、史界の警鐘となり、傍ら風教の維持を倡導して、社会の木鐸となる」[46]と述べられている。

また中村孝也は、先生の学風は合理的実證的であった。この傾向は明治時代より今日に及ぶ日本における史学の正統と思惟されるとし、日本の歴史書はおしなべて多少の教学性を具有しているが、これは国史学の有する特殊性格である。明治時代になって理智を本位とする学術性を強調するものとなるが、それは独り歴史学にとどまらず、社会諸科学に共通に見られる風潮であった。わが史学も独逸流の史学の影響をうけることが頗る大きかった。それは史学を文学や道徳や教学から開放させて、学術として独立せしめようとするものであって、貴重な啓蒙運動たるに違いない。「そこで史料の客観価値が重んぜられ、事実の考證穿鑿が重んぜられ、文書記録が過度に重んぜられ、分析研究と記述説明とが非常に重んぜられ、合理主義、実証主義の学風が一代を風靡した。この大きな時代の潮流の裡にあって、先生は必ずしも全面的な代表者でなかったにせよ、聡明なる開拓者として、史学の発達に多大の貢献をなされた」と三上の当時の立場を位置ずけ、実に適切に表現されている。「先生の史学は、根拠を学術性の上に置いたことによって、時代の開拓者たる任務を十分に果している」[47]としている。

それ故三上の史論の中には、現実社会との間に若干の摩擦が生じている。三上の『懐旧談』でもふれられているが、史料編纂掛の責任者として、南北朝時代の記載は厄介な問題であった。所謂南北朝正閏論である。明治四四年政府は明

治天皇の聖旨にそって、南朝の正統を歴史教育の場で文部省が決定しているが、三上を中心とする『大日本史料』は史料集成の故をもって、すなわち史料であるから、ありのままの事実であるから、南北両朝併立ということにしなければなるまいとした。現在もそのまま続いている。[48]

また明治維新の際の井伊大老の評価をめぐって、教科書調査委員会で問題となった。三上は当時「井伊掃部頭は英吉利と仏蘭西がシナに打勝って、その余威を駆って幕府に迫った。亜米利加もこれに乗じて、亜米利加の好意によって亜米利加に開港を許してくれなかったら、ある時機にやって来ますよ。もし開港してくれたなら英仏がやって来た時に、居中調停しましょうといっている。幕府には開港・否開港両派あったのですが、掃部頭は部下の人に命じて開港することにした。それを文部省の学校教科書の国史原稿には『大老井伊直弼時勢の已むを得ざるを察し、勅許を俟つ暇あらずして条約せり』ということが書いてある。」それに反対する有力委員や水戸派の老人が非常に攻撃して、この文章は「掃部頭を誉めた詞だ、時勢を察する目がない部下の尻馬に乗ってやったのだ」と三上を攻撃した。それで史料を持ってあれこれと議論をした。その時に一番反対したのが山県元帥であったという。それで山県さんに呼ばれてああいう書き方をされては困るというから、三上はそれはおかしい。あなたが島田三郎『開国始末』の序文に書いたのと同じことだ。あの時開国しなかったらどうなったか、誰でも分ることで、あなたも意見を序文に書いてあると反論すると、山県さん自分は書いた覚えがないが、井上毅に書かして、一度読んだことがあるとのことで済んでいる。その後も「天下の人が一人でも井伊掃部頭を悪くいうことは間違いだぞ」といいました。それを速記に取って元老なんか方々に配ったのが問題となって、「こういう不都合な議論をする奴があるからして、大学教授をやめてしまえ」ということになり、結局、これが浜尾（総長）さん偉い所で、「人物の批評で大学教授をやめることは、学問の独立であるまいと、ぽんと蹴られた[49]」。その他面白い話しがまだあるのだが、要するに井伊大老は吉田松陰を処刑した奴で、その井伊を評価するな

どけしからんと長州藩の連中が本気で因縁をつけていた時代でもあった。

更に私の学生の頃に読んだ三上の『国史概説』に、蘇我馬子批判が展開されているのは当然として、馬子と同調する聖徳太子に対する批判が目につく。太子が大臣馬子と政権を掌握し、仏教を朝廷において公認しその興隆をはかり、また馬子と共に物部守屋を誅伐した。憲法十七条で蘇我氏に痛撃を加えているが、我が宗祖神祇のこと及び祖先崇敬の我が国の習慣が一言半句もないことの奇異さなど指摘しているなど学術的な批判が厳しい。この点黒板勝美の論調は穏健で太子に弁護的である。(51)

これらのことに関連して中村孝也は、三上の教室での講義は、「平々淡々、諄々として説き来りながら、語って倦まず、しかもまた人をして倦まざらしめ、津々たる趣味が湧いて盡きず、時間の経過を忘れて聴き惚れるのであった」。三上の大学の講義は人を魅了する一種の風味があったと語っている。「その先生が、しばしば教室の硝子窓を全部密閉せしめて、講義をされたことを記憶している。同学諸君は少くないであろう。それは要するに学術性と教学性との矛盾憧着を感ぜられた場合の処理であった」と三上が研究者として史実の実相に撤しようとされつつも、日本人としてその研究の結果が及ぼす影響の良否など考えてのことであったようだ。(52)

三上の性格について親しく指導を受けた中村孝也は、「先生の御性格が、包容性と妥協性とに富んでおられることである。先生は最も健全なる常識の持主であられた。先生の常識の内容の円満豊富なことは、真に驚嘆に堪へざるものであり、通ぜざるなく、知らざるなく、表にも宜敷く、裏にも宜敷く、国家の大局を達観せらるると同時に、人情の機微を洞察せられ、剛き場合には飽くまで剛い主張を持たれるけれど、柔かな場合には自由無礙の妙味を発揮せらることが少くなかった」と語っている。(53)

三上の生活範囲は学界に限らず、政財界にも、教育界にも拡大されている。三上が東京大学の法科大学を明治二六、

七、八年の三か年間法制史の講義をしていて、その卒業生に浜口雄幸、井上準之助、幣原喜重郎など、この頃の卒業生は各界の第一線で活躍していて、その学恩を受けている人々が多かった。[54] 中村は更に言う。三上が「齢を重ねられるに従って声望隆々として世を壓し斯界の泰斗としてあまねく贍仰せらるるに至った」[55] と三上の社会的立場についてふれている。

三上はよく教え子の世話を懇切丁寧にしている。高弟の東大教授になる辻善之助は、三上と同じ姫路の出身者で、辻が学生の頃から三上は史料編纂所の史料調査に同行させている。卒業後辻は明治三五年（一九〇二）四月史料編纂員となり、明治三八年四月史料編纂官に任ぜられ、日本仏教史の権威となる、大正九年（一九二〇）三上のあとの史料編纂掛事務主任（所長に当る）に就任し、三上の実質的後継者となっている。翌年には帝国学士院で恩賜賞を受け、大正一二年三月に東京帝国大学教授、後に昭和二七年一一月には文化勲章を授与されている。[56]

また同じく高弟の東京帝国大学教授中村孝也は大学・大学院を通じて三上が指導教授であった。中村は大正二年（一九一三）七月東京帝国大学文科大学国史学科を卒業後、大学院に進み「江戸時代文化史」の研究をテーマにした。翌三年に三上の世話で徳川家康の伝記の執筆を依頼されている。静岡県久能山の東照宮では、御祭神徳川家康没後三百年の大祭を大正四年四月一七日に執行されるので、前年よりその事業の一つとして、家康の伝記を撰して御遺徳を顕彰したいということであった。そこで静岡市教育会が執筆者の推薦を三上に依頼し、三上が江戸時代専攻の中村に、家康の事跡を調査してまとめるようにすすめた。中村は春頃から静岡に赴き家康の調査研究に入り、九月下旬より約七十日間を費して『東照公伝』と題する一冊を書き上げ、これが翌年の祭典の際に頒布された。この『東照公伝』は祭典用のものなので、家康を顕彰するものであって、純学術的なものではなかったが、かなりの調査費が支給されていたので、この機会に家康関係の多くの文書や関連した記録を読み、遺物や遺跡を尋ねることが出来、後の本格的な家康文書の研究の

基礎ができることになり、有益なアルバイトとなった。またこの仕事で中村は家康という人物に関心を持つようになった。[57]

中村は大正五年頃から学位論文の作成を考え、近世史研究の中核を享保時代におくことを考えていたが、大正一三年九月「元禄及び享保時代における経済思想の研究」の学位論文を提出し、三上・黒板両教授に報告している。丁度六月に史料編纂掛が拡張する見込みがたって、新しく史料編纂官が必要となっていた。三上は来年度で東大教授を定年になるので、明後年は引退するわけで、後任に中村を推薦したいが、その為には史料編纂官就任が便宜であるとの話しが内々にあったらしい。かくして同年一〇月三上の世話で東京帝国大学史料編纂掛嘱託に、そして翌一四年同史料編纂官に任用され、大正一五年四月文学博士の学位を授与されてから、四月二二日東京帝国大学助教授兼務で文学部勤務を命ぜられた。優秀な人材を適切に世話している。このように弟子に対し、また郷里の人々に対しても親切であった。

今一つふれておきたいことは、三上は大変清潔ずきであって、史料編纂掛に入室するには土足を許さず、上履を用いる掟があった。東京大学の校内で最も清潔が維持されているのが、史料編纂所であると評判であった。それに火の用心が非常に徹底していた。喫煙所は特定の場所以外は一切許さなかった。大正一二年の大震災の時は東大の図書館は火災にあって蔵書を焼失してしまったが、幸いに史料編纂掛は類焼をまぬがれた。史料編纂掛は貴重な史料を保管し、また大名や公家、社寺の貴重な文書・記録類を預かる場合があるから、三上は耐火の信用の出来る倉庫を一つ造ってもらうことにしたという。地階の半分は金庫にしてしまって、火災があってもこれなら大丈夫と安心したという。[58] ここでは何時頃のことか明らかでないが、編纂掛の移転のことを考えると明治四四年の後半のことかと考えられる。

以上三井文庫との関係を考える上で、三上参次のことをやや詳しく広い範囲にわたって先学の教示を得て紹介した。

二　三上参次博士と三井文庫

（一）

明治維新以来の三井家の国家や社会に対する多大の功績によって、明治二九年（一八九六）六月九日三井家同族会議長三井八郎右門衛高棟は華族に列せられ、男爵を授けられた。この受爵のことは実業家畑の出身者にとっては、大変名誉なことであるとして、同族一同の大きな喜びであった。[59] ついで明治三三年（一九〇〇）七月一日新しい時代を迎えて更に三井同族の団結を一層確実なものとするため、三井家の家憲の改定が実施された。高棟は新家憲の規則にもとずいて、惣領家の戸主として三井家同族会議長に再任した。[60]

さて一方明治二三年（一八九〇）役員間の或る紛争に関連して、西邑乕四郎（三井銀行副長）が意見書を出していて、その中に「六十歳以上之重役は常務之関係を脱し、家史と家業之沿革編纂せしむること」の条項があった。そのため明治二四年二月に大元方は西邑に、維新以後の三井同族の履歴調査を命じていて、担当者として三井家資料の収集・整理に着手している。更に明治二八年二月同族会は西邑乕四郎始め、今井友五郎、木村正幹、斎藤専蔵等に三井家伝記取調と編修方に任命している。ついで五月には麻田佐右衛門（三井鉱山理事罷役となる）が『伝記取調掛』に参加している。おもに麻田が中心となっていたようだ。[61]

翌二九年（一八九六）には、三井八郎右衛門高棟が男爵になったことを記念して、『三井家奉公履歴』を四月に出版している。これは慶応三年（一八六七）十二月より明治二九年（一八九六）三月まで、維新以降の三井家が政府及び公共のため盡瘁した事跡を叙述したもので、その記事は当時三井家に保存された記録・文書に依拠して編纂したものであ

る。史実を年代順に列挙している。編輯兼発行人は田中九右衛門（三井元方）、執筆は波多野承五郎（三井銀行）であった。この田中が明治三三年六月『伝記取調掛』の麻田のあとに就任している。このように三井家同族や三井関係会社の間に、その一体化というか、団結を強化する意味でも、三井家の歴史に対する意識が高まっていた。[62]

さて三上の『懐旧談』によれば、明治になって爵位を授けられた功労者たちに、宮内省は正確な系図の提出を求めていて、新しく華族になった家や、なろうとしていた家の系図を正確なものにするため、歴史学者や法律家に自家の系図の鑑定を依頼してくる者が多かったようだ。これには三上もかなりの系図の相談を受け閉口している。[63]

ところが明治二九年八郎右衛門高棟が三井家を代表して男爵を授与され華族となったので、自家の系図を調べて宮内省に提出することになった。三井の場合元祖高利前後からは正確な系図になっていたが、遠祖のことが実証されにくい。三上の『懐旧談』によれば、三上の周辺の金子堅太郎や菊池総長など色々の家が系図を調べておきたいということで、三上も随分相談に乗っている。「また三井男爵家でも新に男爵家になったについて、系図を出さなければならんということで、いろいろ聞かれたことがありました」[64]とあり、また「三井男爵が、八郎右衛門さん、史料編纂掛に数日研究に来られたことがある。それはどういうことかというと、三井家が男爵をもらった所から例の通り系図を糺して宮内省に差出されなければならん。それについてちょうど早川千吉郎君が三井家の理事であった人ですから紹介して、大学の総長へ史料編纂掛の史料を見せてもらいたいということで来られた」[65]と語っているので、このころは高棟議長も三上参次をまだ御存知なかったようである。ここで始めて両者が知りあったし、史料編纂掛の全容をつぶさに見聞されたものと思う。

辻善之助は三上の勤続二五年の祝賀会の「祝文」の末尾に

先生また公餘を以て、諸家修史の事に與かり、各方面の史実を闡明し、史界に裨益する所多し。この他公私苟くも史乗（事実の記録のこと）に関するものは事大小となく、先生の指導監督に俟たざるもの鮮し[66]

とあって、随時三上は専門の歴史の面で助力していたようである。

（二）

三井文庫に『編纂室日記』が、明治三六年（一九〇三）以降、大正昭和と記録されている。主に曜日、天候、それに関係者の出欠から多少事務内容に及んでいるが、事務上のものであっても大変便利である。その他事務の雑記録を片っ端から見て参考にしつつ、三上博士と三井文庫の関係を考察していきたい。

三井高棟議長が三井家系図のことで史料編纂掛の実際を見聞し、『大日本史料』『大日本古文書』のことなど、三上事務主任から聞いてきたに違いない。三井同族会の人々の中にも、また養父高朗（北家総領家九代目）も、かって三井家史の編纂を希望していたこともあって、明治三六年（一九〇三）一〇月同族会議長男爵八郎右衛門高棟が修史の大事業を発議することとなった。同年一〇月三〇日にはこれから編纂の中心として動いた岡百世が、三井家及び三井家事業沿革編纂委員を命ぜられた。なお同時に松田斎之助が任命されている。両人は一一月四日に帝国大学史料編纂掛に出向いて渡辺世祐、藤田安蔵に会い、諸設備に関する事項を見聞してきている。岡百世は明治三一年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業し、大学院に入り、社会学を専攻しつつ教育に従事し、二、三の学校で教鞭を執っていた。明治三五年一〇月三井家同族会事務局に採用され、和書掛をしていたという。その翌一〇月編纂室に移ったわけである。この方は以後も極めて重要な役割を担う方である。

一一月四日高棟議長から来る七日に三上・横井両博士を招待する旨事務局に連絡が入った。これより前に当然高棟議長が三上参次に、三井家及び三井家事業史編纂のことを依頼し、三上が関係することを内諾していたものと推定される。文庫側の資料には見つからないが、高棟議長が直接に依頼したといわれている。そして三上が親しい学友で、三井文庫に最適任の横井時冬博士を議長に推薦した。横井が三上の推挙であることは伝えられているが、事実横井の名著『日本商業史』の明治三一年二月刊行で、三上が明治二六年三月付で同書の中に推薦文を書いている。それによると横井とは親しい学友の間柄であったこと、高等商業学校で内国商業史取調係が置かれ、横井時冬と文学士土子金四郎、菅沼貞風の三人でことにあたっていたが、横井のみ日本商業史を体系化し、江戸時代の終りまで書かれていた功をたたえ、博学堅忍の人、多年非常の辛苦を重ねた成果として、本書の価値を吹聴している。大変広く研究者に読まれた図書である。[67]

さて明治三六年一一月七日有楽町集会所で高棟議長の他三上・横井両博士、早川千吉郎・有賀長文両理事で三井家編纂史に関する協議をし、この時口答にて正式に委嘱していて、後に三上・横井は顧問と呼ばれた。更に三上の洋行談、横井の江州地方の史料探見などの話しが出ていた。編纂については両博士が協議して諸方策について提案することなどを決定して終っている。[68] たまたま早川のことはすでに述べたが、有賀は三上と東京大学予備門と寮で同一時期を過ごしていた関係で、熟知であったと思われる。[69] なお両博士が退席したあとに、高棟議長や理事や岡らが残ったわけであるが、編纂室のことを相談し、議長の意見として編纂室に漫りに他人の出入をさせないようにすることが必要であるとの注意があった。史料の重要性から当然のことである。

三井家編纂史は駿河町三井本館に同族会事務局付属として一室を設けて編纂を行うこととなり、仮に「三井家編纂室」と称された。特殊待遇の嘱託で、後顧問として三上・横井両博士が関係するが、全体の運営を通してみた時に、高棟議長と三上参次は極めて信頼関係があって、必ず専門的な重要事項は協議しているし、人事は三上から議長に相談を

持ちかけて決めている。三上は横井とは何でも話せる間柄として仕事を進めたようだ。理事は編纂事業には干渉出来なかった。結局編纂室は三上の思うようになっていくので、所長のような指導力を発揮していたと私は見ている。

横井博士は尾張国知多郡祖父江の出身で、名古屋藩明倫堂で国学・漢学を学び、後東京専門学校（現早稲田大学）法学科に入り、英語、法律学を学んだ。『日本不動産沿革史』を刊行。東京高等商業学校（東京商科大学現一橋大学）教授となり、『日本商業史』『日本工業史』その他の名著を出版し、明治二五年（一八九二）に文学博士を取得、当時遠藤芳樹と並ぶ日本商業史の権威であった。人柄も大変円満・謙譲な方であったという。三井文庫には最適任の方であった。よく暇があれば三井家編纂室に出てこられた。三井家の文書・記録は横井にとっても、大変研究上有益な史料であったが、明治三九年四月に四八歳で急逝されてしまった。横井博士を失った損失は計り知れない。

さて同年一二月一九日一時三〇分より編纂室で会議を開いている。有賀理事と三上・横井両博士が来室して、編纂方針を協議した。その内容は私が見ても極めて不十分なもので準備ができていないように見えるが、一応紹介しておく。

史料は当初なるべく小分類を立てて蒐集し、漸次之を大分類の綱目の下に総合するの方針をとる。家史と事業史の二大別にし、左の方法によって材料（資料）を蒐集すること。即ち家史にあっては一人一伝とする。系図の編成。全体にわたる事項（臨時及び恒例の二つに区分）。

維新前歴史にありては

1　禁裡御用　衣服御台所　金銀

2　幕府御用　為替御用　衣服御用　神宝方（日光御用）金銀

3　土木事業　新田開墾　堤防河川普請

4　紀州御用
5　諸藩御用
6　呉服店に関する事
7　糸割符
8　吹替御用

維新後の事業史については、顕著なる事業につき、分類を立て、例えば銀行、物産、鉱山、呉服などの部門をもうけて材料（資料）を採集する事　此外旁ら邦家一般に関る歴史経済史料をも編著する方針をもって材料を集むる事[70]

とある。今回は編纂室で協議が行われたので、書記がどの程度正確に記録をとっているか疑問であるが、第一次プランといったところである。

新任者として柴謙太郎が一二月二六日三井同族会事務局より、三井家史及び其事業沿革史編纂の件について嘱託となった。柴は徳島県出身、明治三六年七月東京帝国大学文科大学史学科を卒業し、九月文科大学研究科に入学、研究課題「南海植民史に関する研究」である。更に東京外国語学校で西班牙語を学び、また村上直次郎に就いて和蘭語を学んでいる。少壮実力者を三井家編纂室でかかえた。柴は定年まで長期にわたって三井家の編纂事業に生涯をかけている。柴は三井家編纂室に入ってから研究者としての活動をしていて、昭和九年『中世の経済』岩波書店刊。他「史学雑誌」に四つの論文を、大正一二年から昭和七年にかけて室町時代の座の研究を発表している。「歴史地理」にも七つの論文を経済史全般の例えば貨幣、物価、町人、農村などにふれ、その他「経済史研究」には投銀の研究を二つといった具合で、研究活動に注目すべき成果を収めている人である。

当時は速やかに編纂室の室員を充実して仕事にかかることであった。岡百世や柴謙太郎らを中心に、一月から伊笠硯哉、吉野丑之助を編纂室写字生としてとり、また三月一五日には村田峰次郎を嘱託として採用している。この村田は早速二八日には高輪の毛利家編纂室に出張して調査を始めている。

また江戸時代の三都（江戸、京都、大坂）や松坂などの三井家と店の記録・文書を蒐集・整理することや、本事業に必要な関連資料や文献などの整備、それに必要な関連機関の史料や文献について、例えば東京帝国大学史料編纂掛とか大学付属図書館、上野の帝国図書館、内閣記録課文庫、大蔵省文庫（大蔵省記録課）、大阪市史編纂室、古事類苑編纂所などの蔵本の借用と筆写等を始める必要があった。また個人でも狩野享吉や幸田成友などより重要史料の借用をしている。それに江戸時代の他の両替屋の資料や使用人からの聞きとり調査、他の呉服店関係史料も出来れば蒐集しておきたかった。

このようにして、三井家編纂室はまず最初に『大日本史料』にならった『三井家史料』の編纂に着手したのである。

三井家編纂室には時々高棟議長があらわれて熱意の程を示し、以後定期的に役員会を開いて編纂事業を推進している。早川・有賀両理事も月に二、三度編纂室に出て来て、三上・横井両博士及び室員岡・柴などと打合せをしていた。始め三上は月に二、三度来室して打合せや編纂の実務について指導していた。横井は週に三、四日出勤して編纂のことにあたり、研究を重ねていて、例えば明治三七年一月二三日には一か月間の仕事の内容を簡単に報告している。内容は(1)「大阪日記」一一六冊過半閲了。(2)調査済史料は総て分類し、史料原簿に貼付した。(3)右の記録取調の結果、家史の材料多きため、その編集は比較的進渉したる事。(4)古書旧記類は旧臘京都より送付のあった分、今月に入り会計係及び呉服店より引続き尚亦京都より送付あるべき筈。(5)系図索引を編成し、調査上凡そ常の便宜を得るによりたる事。(6)編纂上の便宜を保つため、古事類苑事務所に関係を付けたることなどを列記して報告している。[71] なおこの種の報告はほぼ毎

月のように行われている。

明治三七年（一九〇四）五月一七日三上博士が来室して、史料稿本印刷に関して会議あり、大略左の通り決定している。即ち稿本三井家史料の編纂方針を示している。

一、史料は三井家史料と題し、今回印刷の分は史料の下へ稿本の二字を加ふ
二、家史料の初に　高利（松寿院宗寿）（樹）　の如く題し通称は史料中にて改称せし時に掲く
三、系図は最も詳悉正確のものを挙く　又最も旧きと思はるるものも掲く　而して他のものは其異同等を註す
四、史料の体裁左の如し
　綱文　三号活字
　本文　四号にて綱文より一字下げ
　参考文　五号にて本文より一字下げ
五、世間の出来事にして三井家に関係あるものは参考中に載す
六、書籍の表題は所蔵者の箱書に従う事
七、史料中原註にあらざる編纂者の註は圏を附す事
八、凡例の次第左の如し
　一　大体の計画
　二　史料の次に家史を編述
　三　体裁は編年体にて綱目に分つ
九、年月不明の史料は終りとする事
十、逸事行状は史料の後に附する事

十一、綱目を立つるに及はざる零碎のものは本人死歿の終に掲く
十二、法事は其人卒去後に附す
十三、綱文を以て目次とす
十四、年譜は今回の分に附せず
十五、木像の写真等は巻首に掲く
十六、図画の説明は別紙とす[72]

以上一人一伝とする稿本三井家史料の編纂構想を定めている。まあ『大日本史料』の編纂に準拠することは、議長、三上・横井両博士、室員の合意の上のようである。

いよいよ家史史料の編纂が始まり、室員一同大変忙しいことになってきた。五月二八日は三上は史料稿本印刷の体裁等に付種々協議し、実際に試刷による活字や文言の検討までしていた。また三上が帰宅してから柴が史料稿本の原稿を持参して被閲を願っている。四、五日して三上が閲了の史料稿本原稿を返すといった仕事が始まり、週四、五回は原稿の校閲・最終印刷の校正と校閲が、全部三上を経由して原稿閲了・校正閲了となっていくことが知られる。

三上は『大日本史料』の刊行の時のような多忙さで、原則土曜日の午後を三井家編纂室にあてていたが、そうもいかず、自宅、大学での連絡を含めて、週四、五回室員と接触しつつ編纂・刊行を進めている。明治三九年の段階では、高利、高富、高治、高興、高弥、高義、高清、高董、高蔭、高祐、高英などの史料の印刷までにこぎつけ、最初に出来たのは高利の宗寿居士史料稿本であって、明治三八年一月三一日、同族全体と三井の重役二人に配布されている。

このような多忙さの故に、明治三九年三月沼田博雄（編纂方嘱託記）、曽我鍜、平山勝男（写字生）の三人を補充し

ている。ただ横井時冬が明治三九年（一九〇六）四月七日病気で危篤となり、同月一八日に急逝されたことは、すでにふれているが、三上にとって大変な痛手であった。

三井家編纂室は創業期、準備期にあって、しかも第一目標として稿本三井家史料の編纂から始めていた。このことは三井同族会としては明治四二年九月二四日、遠祖円光院（高安）三百回忌の行事の年で、稿本三井家史料を先祖に感謝の念をこめて霊前に供えたいという強い希望を持っていて、完成の期日目標が明確に定まっていた。編纂室の整備と充実と編纂事業の推進が創業期の課題であった[73]。

この頃三井家編纂室も忙しくなり、室員も増加してきたので、三上も公務多忙な方であったことから、編纂室に専念することもならず、横井の後任も考えられなかったので、明治三九年一〇月頃から、編纂室事務全般の責任者として岡主任、柴主任補助として、同族会理事の統轄を受ける仕組みになった。また編纂室内部のことは、毎金曜日「下協議会」と呼んで室員が相談する会合を行い、土曜日の午後、三上が来室するのを待って「本務会議」と呼んで裁決を仰ぐことにした。また編纂室員が用務を区分して分担することにし、(1)印刷　(2)書庫の保管整理　(3)参考書買入れ整理　(4)謄写　(5)写真　アートタイプ　(6)庶務とした。製本師も専属を雇っている。室員で協議の上、「本務会議」に持っていったわけである[74]。

さて本来三井同族十一家や、京、江戸、大坂、松坂その他の三井の店々の文書や記録、帳簿類の蒐集が極めて重要であるが、そう簡単に史料が出てこない。文書類には秘密にしておきたいこともあろうし、各家にとっても家宝として大切に保存しておくべきものであるから、そう簡単に出せるものではなかった。

さて明治三九年（一九〇六）六月三井同族の出品によって展覧会を開催しようということになり、五月一二日三上が来室の時、有賀理事より展覧会のことを協議しており、三上から室員一同に申渡されている。六月二、三両日の開催は、

事務局より同族各家、役員、各営業所に通牒が発せられた。五月二四日頃から三井家編纂室は展覧会の準備に入り、一同で受持分担を定めて対応した。事務所は三井集会所に設けた。五月二九日から逐次各家から出品が出てきた。室町家出品九四点。濱町家二〇点。翌三〇日には小石川家六六点。五丁目家一六点。新町家二〇点。伊皿子家軸物一八点。三越呉服店より出品の送付あり。また北家は出品の一部送付ありと記録されている。夕刻高棟議長が見分に見えている。更に翌三一日には南家一三点。五丁目家より高福の油絵の送付あり、事務局会計掛から天秤類の出品があった。その夕刻三上も来場している。六月一日には、小石川家、伊皿子家より出品残分の送付があり、鳥居坂家より円光院御歌壱軸の送付。北家より出品全部送付すると記録されている。この日は高棟議長、有賀理事が見分に来られ、大変な力を入れて展覧会に期待している。勿論目録が作成され室員が印刷場で校正を行なっている。出品は　一部　円光院高安並に円光院以前。二部　高利宗寿大居士寿讃大姉。三部　各家。四部　事業の各部門としていた。参考に系図表を作成した由である。またその折、印刷済の稿本三井家史料九部、その他も展示をしている。

さて六月二日有楽町の三井集会所で、午前九時開会午後五時閉会で、来館者は三井同族各家及び御家族、重役やその御家族、家扶、執事など七七名、翌三日は各営業店使用人等一四七人、その他東京帝国大学史料編纂掛の田中義成博士以下数名を招いている。

編纂室は跡片付の折、必要な史料で未蒐集のもの五〇点程を写真に撮っている。六月五日には全部返還された。この展覧会の開催は家史料編纂になお不足している史料類を、更に同族各家から蒐集する便宜を得たかったとされていた。この催しには同族各位も賛成であって、二月頃から計画されていたようだ。その後確かに編纂室に大量の各家や店の史料が送られてきた。三井同族各位が自らを見直し、その成果を誇らしく思われたのであろうか。なおこの展覧会は、二回目を明治四〇年六月、三回目も目的をかえて開催されている。

明治三九年二月になって松田斎之助が急病で死去された。この方は編纂室開設以来庶務掛など事務を担当しつつ編纂を補助していて、功半ばでのことで惜しまれている。同年六月丸橋金治郎が編纂方嘱託として任命され、室員の戦力となった。同年一〇月一七日には事務室の分担割当を決めている。

三上は同年九月には六回程、一〇月も六回程来室し協議会を開催し、史料編纂細目の協議や高棟議長との打合せ、編纂室事務分担の決定などをこなしている。一〇月二三日には、来室した三上へ印刷した史料を提出している。即ち高博、高方、高董、高美、高平、高房、高祐、高蔭の各史料と町人考見録、三井家譜草稿、三井家系草稿以上十一冊である。依然として三上の大学や自宅に室員の往復がしきりと行われていて、主に史料の校閲である。一一月一五日には編纂室が拡張されたというが、三上も三井家編纂室の仕事の多忙さが目立つ。

明治四〇年一月には沼田博雄が退職し、村田峯次郎も病気で長期欠勤となり、その補充として一月一四日斎藤隆三と遠藤佐々喜二名を編纂方嘱託として任命している。これから主な室員として、編纂に重要な役割を果す学者である。正月七日より三上は岡百世と大学で打合せがあり、同一二日には三上来室の上協議会が開かれていた。人事が急テンポで実行された。

斎藤隆三は茨城県出身、明治三五年（一九〇二）東京帝国大学文科大学国史科を卒業し、明治四〇年（一九〇七）一月に三井家家史料並びに事業史編纂方嘱託となった。ところが大正の初年には病気のため退職している。この方は当初近世世相史の研究者であって、後大変お元気になられ、横山大観らとともに、日本美術院を再興し、同常任理事となる。昭和七年には「江戸時代前半期の世相と衣裳風俗」で、東京帝国大学から文学博士の学位を取得、更に岡倉天心偉績顕彰会専務理事、昭和三六年（一九六一）四月七日、八六歳で没している。業績も数々あって『元禄世相史』（博文館明治三八年刊）、『近世世相史』（博文館明治四二年刊）を始めとして、数々の書物を残している。三井文庫退職後も活躍

し、業績も多数刊行し、日本の歴史学及び芸術史関係に指導的役割を果された方である。遠藤佐々喜は島根県出身、明治三九年七月東京帝国大学文科大学史学科卒業、同年九月大学院に進み、東洋文化要素の西漸を主題とした。修了後教員や雑誌の「史学界」の編修などに従事、同三九年には外国語学校臨時図書編纂事務嘱託となり、翌四〇年一月三井家同族会事務局編纂嘱託となり、以後三井文庫に生涯をかけて文庫事業を守った貴重な方である。遠藤は三井文庫で経済史の研究を始められたようで、三井家史料という大変貴重な史料を毎日手掛けることによって、よい研究者となった。個人的に江戸時代の貨幣や金融を高いレベルで研究し、社会経済史学や経済史研究に随時研究発表がなされ、「社会経済史学」に十論文、「史学」に五本、その他「貨幣」、「交通文化」、「歴史公論」などに、三井文庫の内容を離れて研究成果を発表された。例えば「江戸時代の公金為替制度に於ける御為替組の発達真相」（「社会経済史学」四巻六号）、「再吟味を要する江戸時代貨幣研究の基本問題」（「経済史研究」三号）などなど当代貨幣金融史研究の第一人者として貢献された方である。その成果は三井高継編著『校註両替年代記原編』、『両替年代記』資料編上下（岩波書店刊）にその力量を発揮している。また富山房の『国史大辞典』は、全八冊中四冊までで以降挫折しているが、この四冊に遠藤は貨幣項目を多数執筆していて、極めて有益である。論文集の刊行が期待される民間研究者であった。

明治四〇年一月一九日三上が来室して、人員の増加に応じて室内の事務分担を改めている。印刷場　柴謙太郎、書庫　斎藤隆三、補助　南茂樹、平山勝男、本田善平、参考書類　遠藤佐々喜、写字監督　丸橋金治郎、写真アートタイプ　曽我鍛、用度に関する事務　吉野丑之助となった。また室員の研究活動を進めるため、研究発表や研究会を持つことになり、柴謙太郎の「幕府勘定所組織」の談話が行われている。(77)

明治四一年一〇月三井家編纂室と別に、三井家の顧問であった井上馨の伝記編纂のため、三井本館内の一室に編纂分室が設けられた。井上が明治維新後、三井の事業や家制度を援助していたことを明らかにしておきたいとして、三井家

編纂室の仕事でもないので分室を設けたもののようだ。これには渋沢・松尾両男爵に高棟議長、高景管理部長、その他益田（孝）、有賀各役員、三上顧問も加わり、編纂方針に関与している。主任は横山達三（新聞記者畑）で第一回の談話会が行われている。故老の昔日談等速記された。分室では独自の行動を行なっていたが、明治四四年六月に突然横山を解職とし[78]、後に述べるが澤田章が後任となった。いずれ業務は三井家編纂室に合併されていくが、昭和五年一〇月に『世外井上侯伝』五冊が刊行されている。

稿本三井家史料は一人一伝として、三井十一家の歴代当主の各伝記史料の編年集成であって、期日は明治四二年（一九〇九）九月の遠祖円光院三百回忌に間に合わせるように定められていた。明治四〇年一月からは室員総勢一五名で、各伝記史料を各一人一冊分担して期限をつけ、二冊目、三冊目と同じように進めていく方式で、いわば突貫作業を推進し、三上が印刷原稿、最終校正を全部校閲するといった凄まじい仕事が、東京帝国大学勤務の余暇をフルに利用して行われていた[79]。課題はいくつかあった。例えば遠祖史料参考は調査研究がなお思うように進まず、史料蒐集を重ねたいところであった。また高安史料の取扱いや、明治維新以後の三井家の直面した課題など、研究を必要としていたようだ。また同族の中には、短期間の稿本三井家史料の印刷に危惧を感じている方も存在していた。

印刷その他編纂事務を促進するため、三井本館の構内に印刷場を専属に利用するようにし、伝記史料の原稿が直ちに印刷できる体制をつくった。一日百頁を組上げる作業となっていた。挿し絵や木版等も作成された。このような体制は明治三八年六月頃から用度のもとにある設備を相増し、人員も強化して、専ら『稿本三井家史料』の印刷の促進をはかった[80]。

さて第一稿本三井家史料が全部出来上がったのが九月一三日のことであった。九月二四日円光院殿三百年遠忌の儀式が京都と東京で行われ、家史料第一稿本革製の上製本八三冊が京都顕名霊社に奉献された。東京では有楽町三井集会所

の同祭典にクロース並製本の家史料八三冊が献じられた。[81] 高棟議長は編纂員一同の大変な苦労を犒ったという。印刷三井家史料第一稿本の完成で、第一期の主なる仕事が終了し、次の段階に入ることになった。印刷場も九月一四日には縮小し、職人も半減した。[82]

この第一稿本作成中に展覧会の影響もあって、京都から数回に渉って引継がれた文書類が多量に送られてきた。帳簿類も含まれている。その内容も極めて重要なものが含まれていた。ところがこれらの文書・記録類を、進行中の三井家史料に途中から追加する時間の余裕は全くなかったので、「稿本」として近い将来を期して完全なものを作成することにし、当時は全く忙しかったので、天井裏の広い一室に戸棚を沢山作って、包装のまま収蔵した。第二期の整理の対象となるものである。

この『稿本三井家史料』は以上三井家として史料的に不完全ではあったが、また、その後の三井事業史の編纂にはあまり役に立たないという声もあるが、江戸時代を通じて経済史に関する重要史料が収載されていて、私などは研究上大変有益に利用させていただいている。

（三）

明治四二年一一月、三上は今後毎土曜日の午後に来室するということで、新に座席が設けられた。一一月中に第二期計画を策定するため編纂担任を、大元方並に大元方事業史料担任柴謙太郎、呉服事業史料担任斎藤隆三、為替両替事業担任遠藤佐々喜とし、また家史料の修正分担も定めていた。以後本格的事業史研究に入っていく体制が固まった。一二月一七日には第一稿本三井家史料総目録の印刷が出来ている。この時三上は本・分室員を常盤華壇に招待し、慰労の宴を行っている。このような三上の配慮は毎年のように六月、一二月頃行われていた。明治四三年一月一一日北三井家で

は、三上博士を招待の上饗応があった。室員岡百世、柴謙太郎両人が陪席している。昨年の謝礼の催しであったか、今後の期待なのか。[83]

さて一月一七日松本勘太郎が三井家編纂事務を嘱託された。故丸橋金次郎の後任である。松本は東京の日本橋区蠣殻町出身、明治四一年七月東京帝国大学文科大学国史学科卒業、直ちに大学院に入学、同四四年六月に退学している。明治四三年一月より三井家編纂室に勤務し、生涯三井家の編纂事業につくした。松本は始め両替事業史の斎藤の補助となった。柴、斎藤、遠藤、松本等有力スタッフは皆三上の教えを受けた人々ということになる。三上はこの頃三井家編纂室に加えて分室にも関係し、三上の来室の際は、岡百世、横山達三の三者間の協議もよく行われていた。三上は七月、八月には月六回程来室している。

分室の横山の後任として明治四四年一一月一八日澤田章が三井家編纂事務を嘱託されている。明治三〇年国学院を卒業し、東京帝国大学の附属図書館勤務、文科大学助手図書館兼務、同司書を経て、明治四二年国学院大学講師であった。三上の国学院の教え子という。澤田は分室の横山のあとを継ぎ、やがて三井家編纂室の仕事に就く人である。この澤田は後国学院大学教授となり、また初代の国学院大学附属図書館長となった。業績に明治財政史を専門として『明治財政の基礎的研究』、それに『西陣織屋仲間の研究』などなどの著書がある。[84]

明治四三年二月第一稿本の編纂が終って、新しく第二期計画として四三、四四、四五年の編纂計画が策定された。三井家一統の家史（家族史）と商家として事業史の編纂計画が立てられた。家史については三上の大学時代の級友高津鍬三郎に嘱託し執筆にあたらせたが、約五年をかけ稿本が出来た。但し大変不完全なものであって、家史は一時中断した。

三井事業史についての分担は

顧問　三上参次　主任　岡百世

大元方史　第一部担当　柴謙太郎（大元方とは三井家同族と三井諸事業の本部機構をさす。宝永七年―明治二五年まで存在）

呉服事業史　第二部担当　斎藤隆三　補助　南茂樹　曽我鍬。

両替事業史　第三部担当　遠藤佐々喜　補助　松本勘太郎　藤本清

と決定した。

ところが事業史を作成するためには、研究・執筆者が最も不便であったのが、目録台帳の不備・不完全なことであって、大変作業が困難であった。それで事業史編纂に先立って明治四三年一〇月以降、まず全員で記録・文書（帳簿類を含む）の台帳の作成とその印刷に全力をそそぐことになった。このことは明治四五年三月までかかって、『三井家記録文書目録』の本号、別号、続号上巻の三冊の目録台帳が作成された。目録は引継ぎ順によるとのことである。なお続号上巻には未整理の三井家同族会事務局京都出張所、同同族会会計係、旧三井呉服店などより、数回にわたって引継がれたものであった。

明治四五年九月から第二次三か年計画が開始され、本格的に各部事業史の編纂に従事した。三上は呉服事業部、両替事業部に対し計画書の提出を求め、協議し、夫々の稿本を校閲するといった仕事が繰り替えされていく。今回は紙数の関係で以下をここでは略すことにした。

ただ京都出張所より多量の史料を引継いだため目録台帳の作成がつづき、大正二年六月「続号中巻」、大正五年「続号下巻」を作成、全五巻の三井家史料の全貌が明らかになった。[85]

岡、柴、遠藤、斎藤など遠祖史の調査に出かけ、また三上も遠祖史の調査のため自ら江州三井史蹟調査を行っているが、[86]結局このことは編纂の片手間に行っても収穫が少ないことから、責任者を別に求めることとし、史料編纂所の嘱

託であった芦田伊人に佐々木氏関係の史料調査を依頼し、柴・斎藤の研究を助けてもらうことになった。

さて明治四五年五月一一日土曜日の午後に、三友倶楽部で編纂報告会が開かれ、高棟議長、室町殿、伊皿子殿、有賀理事出席のもとに、三上顧問及び各担任者より報告があった。この日は柴、斎藤、遠藤、長谷川が出席していた。そこで三上は大要次のような報告をした。

この報告は事業史の件であった。その時編纂室所蔵の記録文書について、記録一五、二九〇点、文書六四、八三三通、合計約八万点以上ということを述べた。これは『三井家記録文書目録』の本号、別号、続号上・中四冊分である。

遠祖史は助手一名をおき取調べている。維新後のことは担任者交替のため、少々成績がおくれている。これは維新後の三井沿革を調べることで、目下少し脇道に入って、三井家と井上公との財政上の関係、経済上の関係というようなことを、纏めることになっている。これは脇道のことであるから、出来るだけ早く纏めて、本来の三井家史の方に早く立ち帰りたいということになっている。

また記録文書は整理されただけでも八万点で、それは家宝であり、国の宝とも言いうる。故にその保存は三井家のためには勿論、国家のために出来るだけ完全を期さねばならぬ。今の処では誠に不安である。今まで危険なしに保存されたものを、東京へ纏めたために怪我があっては申訳ない。編纂事務室と余り離れない処で、立派な土蔵を建てる必要があると報告している。(87)

この三上の報告書から、やがて大正七年（一九一八）の戸越の三井文庫の創設につながっていくのである。戸越の旧三井文庫の書庫は実に堅牢無比で余裕のある造りであった。

このようなことは明治三七年頃、横井顧問もこの三井家の史料は大切なもので、編纂も有楽町の三井集会所あたりの横の長屋にでも事務所をおいて、そこの土蔵に保管するようにならねば、火災の危険が多い等と注意していたという。

また三井同族の京都の新町家高辰も、三井の古書類は編纂事業修了後と雖も、永く三井家の家宝として保存すべき必要があると強く警告している。

（四）

さて三井文庫の大正・昭和の歴史は、ここでは割愛するが、同じように三井事業史の編纂が行われ稿本原稿が作成されていたが、一部を除いて印刷はなされていなかった[88]。最後に一、二、三上と三井家及び三井文庫との関係を書いておきたい。

大正二年（一九一三）四月一七日三上家では、三井同族の本村町家と縁組が成立して、三上家は三井同族と姻戚関係になり、三井同族の三上に対する信頼関係は益々深まっていた。編纂室員も大いに祝賀の意を表していた[89]。

さて昭和一四年（一九三九）になっても、月に三、四回三井文庫に来庫している。この頃は毎水曜日の午後に来庫され、相変わらず編纂の統轄に当っていた。

同年四月一五日岡主任、柴、遠藤三名は、四月末をもって任期満了となり退職することになった。山口栄蔵、中井信彦らと代替りの時期をむかえていた[90]。

同年五月四日文庫事務章程の検討が行われ、五月一〇日三上が四時頃来室して執務規約その他を決定し、文庫の方針を報告している。五月二四日も三上は午後四時一五分に来室している。また五月二七日には宮内省の臨時帝室編修局の編修長室に出勤している。そして五月二八日三上は夕刻に発病し、六月七日終焉を告げられた[91]。同日三井文庫では電話連絡をうけ岡主任、松本、竹村、山口、中川が取敢えず三上邸に出向いている。最後まで高棟議長始めとする三井文庫に対して、顧問として三上は継続的によく指導されていたことが知られよう。また室員との関係も極めて良好で協力関

係のもとで文庫の育成と編纂事業が進められた。三上顧問の三井文庫での業績を評価したいと思う。

（なお、三上参次博士の史料調査や諸論文の紹介と明治末、大正、昭和期の三井文庫との関係、特に三井事業史の編纂との関係について機会があれば補足したいと思う。）

（1）「史学雑誌」五〇編九号。東京大学『史料編纂所史　史料集』五二三頁以下に同一のものがある。また三上参次著『江戸時代史下巻』（富山房）の巻末に「故三上参次先生略歴」として同一のものが収載されている。

（2）「歴史と趣味」二一編、五、六号。ほぼ同じものが三上参次著『江戸時代史下巻』の巻末に収載されている。

（3）三上参次著『明治時代の歴史学界――三上参次懐旧談』（吉川弘文館刊）。以後本書の引用は『懐旧談』と呼称する。

（4）『辻善之助博士自歴年譜稿』（辻善之助先生誕生百年記念会）一二七―一三一頁。

（5）東京大学史料編纂所史　史料集　五二〇―五二三頁。

（6）東京大学史料編纂所史　史料集　五一四―五二〇頁。

（7）「史学雑誌」五〇編七号、「三上参次著作年表」。

（8）中村孝也「播州船津村の半日」（「歴史と趣味」）一六編八号所収。

（9）懐旧談、四〇頁。

（10）懐旧談、四六頁。

（11）懐旧談、四七―四九頁。

（12）懐旧談、四七頁。

（13）東京大学史料編纂所史　史料集二頁。

（14）懐旧談、五八―六〇頁。

（15）懐旧談、一四八頁。拙稿「中村孝也」（『二〇世紀の歴史家たち(5)』刀水書房刊）。

(16) 懐旧談、一四九頁。
(17) 東京大学史料編纂所史　史料集　五一六頁。
(18) 懐旧談、一一一―一一二頁。
(19) 辻善之助「故三上参次先生略歴」。
(20) 懐旧談、八〇―八一頁、「故三上参次先生略歴」、東京大学史料編纂所史　史料集　四二頁以下。
(21) 辻善之助「故三上参次先生略歴」。
(22) 東京大学史料編纂所史　史料集三七五頁。帝国大学文科大学史料編纂掛草創期の教職員。
(23) 東京大学史料編纂所史　史料集四二頁。
(24) 懐旧談、一一一頁。『東京大学史料編纂所史　史料集』三七八頁。
(25) 懐旧談、一一一頁。
(26) 懐旧談、九六―七頁。
(27) 東京大学史料編纂所史　史料集　四九頁。
(28) 懐旧談、一五一―二頁。
(29) 懐旧談、一六二―三頁。
(30) 東京大学史料編纂所史　史料集　五二二頁。
(31) 懐旧談、一八〇―二頁。
(32) 懐旧談、一八七頁。
(33) 東京大学史料編纂所史　史料集　五二二頁。
(34) 懐旧談、一二一―二頁。
(35) 東京大学史料編纂所史　史料集　五二二頁。同五六七頁、明治三八年度予算案中史料編纂掛事業を経常費事業とすべき

理由書。

(36) 懐旧談、二二八頁。

(37) 懐旧談、二三三―四頁。

(38) 辻善之助「三上参次先生略歴」。

(39) 辻善之助「三上参次先生略歴」。

(40) 本論一八頁参照。

(41) 大阪朝日新聞、昭和一一年三月九日付号外　同新聞翌一〇日文相就任辞退の記事参照。

(42) 辻善之助「三上参次先生略歴」。
中村孝也「三上参次先生を憶ふ」（「歴史と趣味」二一編六号八頁）。

(43) 辻善之助「三上参次先生略歴」。

(44) 中村孝也「三上参次先生を憶ふ」（「歴史と趣味」二一編五号六号）。

(45) 中村孝也「三上参次先生を憶ふ」（「歴史と趣味」二一編六号八頁）。

(46) 辻善之助「大正六年先生の勤続二十五年の時の祝文」（辻善之助博士自歴年譜稿」一二八頁。

(47) 中村孝也「三上参次先生を憶ふ」。

(48) 東京大学史料編纂所史　史料集、八四二頁以降参照。懐旧談、二〇七―二一〇頁。

(49) 懐旧談、二一五―七頁。

(50) 三上参次『国史概説』（富山房刊）第六章推古天皇時代参照。

(51) 黒板勝美『更訂国史の研究』各説上、岩波書店刊。第二章第五　法興肇憲時代。

(52) 中村孝也「三上参次先生を憶ふ」。

(53) 中村孝也「三上参次先生を憶ふ」。

(54) 懐旧談、一五一頁。
(55) 中村孝也「三上参次先生を憶ふ」。
(56) 辻善之助博士自歴年譜稿。
(57) 中村孝也「中村孝也年譜」『新訂徳川家康文書の研究』下巻之二所収。中村孝也「徳川家康文書の研究」完成祝賀会記事「歴史と趣味」二三編四号。中田易直「中村孝也」(『二十世紀の歴史家たち(5)』所収)参照。
(58) 懐旧談、一一四―五頁。
(59) 三井八郎右衛門高棟伝、二〇四頁。
(60) 三井八郎右衛門高棟伝、二三三―四頁。同資料編三井家憲ならびに関連規則八一九頁以下参照。
(61) 三井文庫沿革(柴謙太郎談話要領)。
(62) 三井家奉公履歴全。
(63) 懐旧談、一八七頁以下参照。
(64) 懐旧談、二一四頁。
(65) 懐旧談、二一九頁。
(66) 辻善之助博士自歴年譜稿、一二八頁。
(67) 『日本商業史』明治三一年一二月刊初版本、三四三頁目に、四頁にわたって三上の推薦文がある。なお本書は大正一五年三月横井の令息によって再刊されているが、それにも三上の推薦文が序文のあとについている。他に『日本工業史』、『芸窓裸載』(論文集)、『日本絵画史』などの著書がある。
(68) 編纂室日誌、明治三六年一一月七日の項。
(69) 明治一六年一一月二四日東大寄宿舎事件で寮生一四六名が不都合のことありとして退学を命ぜられている。それに三上も有賀も予備門生として出てくることから知られる(筆者所持)。

(70) 編纂室日誌、明治三六年一二月一九日の項。
(71) 編纂室日誌、明治三七年一月二三日の項。
(72) 編纂室日誌、明治三七年五月一七日の項。
(73) 編纂室と編纂事業のことなどは、編纂室日誌、明治三七、八、九年度参照。
(74) 三井文庫沿革（柴謙太郎談話要領）。
(75) 編纂室日誌、明治三九年六月二―五日の項。
(76) 『近世日本世相史』博文館、『近世時様風俗』三省堂、『江戸のすがた』雄山閣、『近世世相史概観』創元社。
(77) 編纂室日誌、明治四〇年一月一九日、二月二二日の項。
(78) 編纂室日誌、明治四三年二月一二日の項。同年五月二五日、二八日、六月二七日項。
(79) 編纂室日誌、事務書類自明治三九年九月―至四二年一〇月参照。
(80) 編纂室日誌、明治三八年五月一五日、六月三日等。
(81) 編纂室日誌、明治四二年九月一三日、二四日の項。
(82) 編纂室日誌、明治四二年九月一四日の項。
(83) 編纂室日誌、明治四二年一二月、四三年一月参照。
(84) 藤井貞文「澤田章先生」（「国史学」別冊五十年の回顧）。
(85) 三井文庫――沿革と利用の手引き五―六頁。
(86) 編纂室日誌、明治四四年八月四日の項。
(87) 三井文庫沿革（柴謙太郎談話要領）。
(88) 稿本三井家事業史料　呉服店制度（自元禄至享保）一冊刊行されている。
(89) 編纂室日誌、大正二年四月一七日の項。

(90) 日誌、昭和一四年参照。
(91) 日誌、昭和一四年六月七日の項。